

ニートの夢

世間は景気がよくなってきたそうで、特にこの地区の求人状況はかなりの売り手市場だということらしい。だからというわけでもないが、就職してもすぐやめる若者もふえているようである。彼らは一度仕事についているわけなので、いわゆる純粋な？ニートより意欲はあったはずである。

彼らの言い分は「仕事が思っていた内容とちがっていた」「自分に合わなかった」ということらしいが、こんなことが理由になるのだろうか。どんな仕事であっても、外から見てその仕事内容のすべてがわかるような事はないのではないかと。例えば教師は授業だけをやっていればいいわけではなく、野球選手だって試合だけをしているわけではない。むしろそのように表に出て見えている部分こそ氷山の一角であって、ほとんどが地味で泥くさい仕事（訓練・準備など）であると考えてよい。「それを知ったから自分に合わないことがわかったんだ」と言い出しそうであるが、先にも述べたとおり、そもそもその職業の全容が事前にわかっていないのが当たり前とすれば、何の努力もする前の、そのままの自分がその仕事にすんなりあうこと自体奇跡と考えるべきである。つまり自分がその仕事にあこがれ、やりたいと思った面もあるだろうが、学生のころは全く予想もしなかった能力を要求されることも当然あるのである。従って本当に自分のやりたい仕事に就くには、自分を変えたり、苦手な分野の勉強をしたりして、仕事にあわせる努力を嫌がってはならないのである。

要はこの努力が嫌で仕事をやめてしまう者は、結局「自分の能力を生かしてくれる職業がない」と言っているニートと大差はないのである。こうした若者（とは限らないが）は転々と職を変えて「自分探し」を永久に続けるか、部屋にこもって親のすねをかじり続けることになっていくのだろう。

ここにあるのは肥大した「完全無欠の自分」という妄想である。自分は完璧で悪くないから、合わせる（変わる）べきなのは相手（会社）の方だという理屈である。しかし残念ながらそれを認めてくれるのは、盲目的な親ぐらいなもので、世間はあなたの才能に過度な期待などしてないものなのである。

本来は職業を一面的にしか見られなかった「未熟な自分」なのだから、上司や会社に合わせる事で多くのことを学んで一人前の仕事ができるようになっていくのである。

結局は素直な性格の者が、一番自分の夢を実現する可能性が高いのではないかと思う。